

専攻主任



学位論文審査結果の要旨

論文博士申請者 小林 孝二

審査委員

主査 大垣 直明

副査 飯田 雅史

副査 佐藤 孝

アイヌ文化成立期から近世期末におけるアイヌ民族の建築に関する研究

本論文はアイヌ文化成立期（1300年頃）から近世期末（19世紀末）におけるアイヌ民族の建築（住居および倉・飼育檻などの付属施設）の外観、平面形態、柱間数、寸法体系、柱の建立方式、構法などについて明らかにした研究である。

アイヌ民族の建築に関する居住歴のある住居に対する建築学的調査研究は1930年代～1940年代にかけて棚橋諒と鷹部屋福平の両名の建築構造系研究者によるものに限られていた。その後の研究・論述は両名（特に鷹部屋福平）の著作の引用であり、復元住居も鷹部屋らの指導によるものである。著者は大きく2つの問題意識からこの研究に着手した。1つは、復元住居や定説として語られているアイヌ民族の建築が果たしてアイヌ民族の建築を正しく捉えているのか、アイヌ民族の建築も時代とともに変化・発展してきているのではないかという疑問であり、2つは鷹部屋らの調査した住居はせいぜい20世紀初頭に建てられたものであり、アイヌ文化期の成立する1300年頃から1900年までの時期のアイヌ住居の実態については全く実証されていないという事実である。この研究の空白期間におけるアイヌ民族の建築に関する資料は極めて乏しく、18世紀半ばから19世紀半ばにかけて描かれた絵画資料と13世紀から18世紀半ばに建設された住居群の発掘資料に限られている。筆者はこの2つの資料に着目し、1) 2つの資料群（絵画資料と発掘資料）を網羅的に整理・集成することによって、アイヌ文化成立期から近世期末におけるアイヌ民族の建築を研究する基礎資料（データベース）を構築すること、2) この資料群を詳細に分析することによって、アイヌ民族の建築の外観および材料（屋根形態、壁）、平面形態（平面形、面積、柱間寸法）、構法（柱間数、柱の建立方法、架構の組立方法）などを明らかにし、研究の空白期間を埋めること、3) 現在、認知されている定説の真偽を検証することを大きな目的としている。

この研究を通して、アイヌ文化成立期（1300年頃）から近世期末（19世紀末）におけるアイヌ住居の特徴として、1) 屋根形態は切り妻系と寄せ棟系に大別され、壁は内傾しているものが多い。2) セム（前室）を持つ住居とそうでない住居があり、後者は遅れて出現する。3) 平面系は整形のものとそうでないものがあり、短辺は奇数柱間、長辺は奇数柱間と偶数柱間が混在している。4) 面積は20㎡前後と50㎡前後に多く分布している。5) 長辺側の柱間寸法は140～160cmであり、人体寸法（一尋）によるものと推定できる。6) 柱は打ち込み柱である。7) 建設方法は地上で小屋を組み、その周りに柱を打

ち込み、小屋組みを持ち上げて柱に固定する。 8) 小屋組みの構造は複数存在し、鷹部屋の主張するケトゥニ（三脚構造）は明確には見いだせない。さらに、付属建築物（倉）の特徴として、1) 高床式であり、柱は住居よりも太く、掘込み式・打ち込み式・両者併用が存在する。 2) 柱数は4本・6本・9本が主流である。 3) 住居とは別の技術体系であることなどを明らかにした。このことによって、これまで研究の空白期間であったアイヌ文化成立期（1300年頃）から近世期末（19世紀末）におけるアイヌ民族の建築の実態を実証的に明らかにし、北海道建築史の空白期間を埋めた。さらに、その成果から、鷹部屋福平によって提示された「アイヌ民族の建築」は1900～1940年の一時期におけるアイヌ民族建築の一部の状況を明らかにしているに過ぎないことにも言及している。

本論文は7章で構成されており、その概要は以下の通りである。

第1章は、研究着手に至った背景、研究の空白期間の存在とその時代を対象とする研究の必要性和意義、研究の目的と方法について記述している。合わせて、研究資料として用いた絵画資料・発掘資料の特徴と限界について述べている。

第2章は、アイヌ民族の建築に関する既往研究・論述を網羅的に収集し、それらを年代順に論旨を整理し、アイヌ民族の建築に関する研究史としてまとめた。この整理により、本研究の研究課題をより明確にしている。

第3章は、近代以前に描かれた絵画資料からアイヌ民族の建築が描かれた図像を網羅的に収集し、整理・集成した。この中から住居に関わる図像を抽出・分析し、アイヌ住居の外観的特徴と構造について明らかにした。同時に、現在の復元住居や普及・啓発書の記述と異なる形態・構造の住居を確認した。

第4章は、アイヌ文化期を対象とした発掘報告書から発掘された建築跡の資料を網羅的に整理・集成し、これらの資料から住居跡に関わる事例を抽出し、その平面構成の特徴（形状、規模分布、柱間数、柱間寸法など）を明らかにした。さらに、建築工程や寸法体系についても分析・考察し、一定の基準寸法の存在の可能性を示した。

第5章は、絵画資料と発掘資料から熊檻・飼育檻と倉など住居に付属する建築の資料を網羅的に抽出し、両資料を総合的に考察し、付属建築の特徴を明らかにした。さらに、付属建築の建築工程や寸法体系について分析し、住居とは異なる技術体系の存在の可能性を示した。

第6章は、絵画資料から狩猟小屋などの仮設建築（露営小屋）を抽出し、その特徴を明らかにし、さらに露営小屋には2つのタイプに分類できることを明らかにした。

第7章は、住居・付属施設の全体を俯瞰し、建物全体の特徴とその変遷過程を総括的に論述している。その結果を踏まえて、現在アイヌ民族の建築様式の定説となっている事項の検証を試み、多くの部分で誤り・不正確さなどの欠陥を持つ可能性があることを示した。同時に、アイヌ文化成立期（1300年頃）から近世期末（19世紀末）期間における残された研究課題、さらに残された研究の空白期間（19世紀後半から20世紀初頭）の研究課題について言及した。

以上本論文において、アイヌ民族の建築研究でこれまで全く手が付けられてこなかったアイヌ文化成立期（1300年頃）から近世期末（19世紀末）におけるアイヌ民族の建築の特徴を明らかにしたことは、北海道建築史の空白を埋める極めて重要な成果であり、わが国の建築史研究の上からも高く評価される。さらにアイヌ民族の建築に関する資料が極めて乏しい状況の中で、絵画資料と発掘資料に着目し、それを網羅的に収集・整理・集成し、研究上のデータベース化した成果は今後のアイヌ民族の建築研究の発展に大きく寄与するところ大である。よって、論文著者は博士（工学）の学位を授与される資格があるものと認める。